

## 川村美術館見学記

美術通のある会員の方の提案で5月29日に美術と歴史の会で千葉県佐倉市にあるD I C川村美術館を見学した。D I Cは大日本インキ製造(株)と称していた会社だが、事業の幅を広げて社名を今様にしたようだ。歴代の会社幹部が美術の愛好家であり、そのコレクションがこの美術館の基になっているという。

参加予定者で不測のことが起こった人があったため参加者は10人であった(文末に参加者名を記す)。千葉県外の参加者は東京駅から乗り換え無しで同美術館に行ける一日一便のバスを利用した。

川村美術館に到着したのは予定より早めの11時前だった。館内のレストランから当日の仕入れ状況で変わるランチのオプションがあるので早めに席に着くように勧められていた。ボストン会の名で予約した席は、白鳥の泳ぐ大きな池を囲むように、どこまでも広がっている庭を一望できる特等席であった。

各自で選んだオプションはウェイトレスを悩ませるほどに多様だった。千葉産の食材を活かしたイタリア料理であった。地元のクラフトビールも好評だった。

談笑に花が咲いた。気が付くと1時だった。急ぎ足で美術館に向かった。建物、そのものが芸術品だと圧倒されながら館内に入る。



最初の部屋「印象派からエコール・ド：パリ」に圧倒される。第一級の作品がずらりと揃っている。我々以外に人は居ないので、作品にどっぷりとひたることができた。次はレンブラントの「広つば帽を被った男(1635)」だけの部屋を一人で静かに鑑賞した。

ついで「初期抽象」、「ポップ・アート」、「シュルレアリスム」、さらに現代の抽象絵画へと進む。画家の意図が筆者に

はだんだん読み取りにくくなってきた。「だから疲れる」との声も聞こえた。

特別展は「ジョゼフ・コーネル(1903-1972)のコラージュ・モンタージュ」であった。身の回りにある写真や本などをガラス板で閉じられたシンプルな箱の中に入れた作品である。

シュルレアリスムの技法を用いて、彼の感性のままに作り上げているという。理性でとらえようとしてはいけないようだ、つまり筆者には難解だった。

庭に出た。早緑の森に囲まれた池に白鳥がゆったりと浮かんでいた。数日前の猛暑日が信じられない、それはありがたかった。そして、みどりの風を胸の奥まで吸い込んだ。



さて来るときに気が付いたが都心に向う道路は朝から込んでいた。夕刻にはきっとさらに渋滞になりそうだと案じた。それで予定を変えて美術館のシャトルバスで佐倉駅（J R／京成線）に出て、それぞれの家に向かった。（写真は小野田氏による）

参加者（順不同、敬称略）：藤盛夫妻、小野田夫妻、棚橋、森（裕子）、  
酒井夫妻、三好夫妻

（担当幹事 三好 彰 記）